五升葬文草

卷二

蝶夢和尚文集巻第二目録

七老亭賦
湖水を遊る賦
理菊の説
蜂の巣の説
湯嶌三典の説
白氣の説
古壺と名づくる説
枝法と号る説
瓦金と名付くる説
犬城の考む辞
瓦金を塘縁を嫌る辞
義草稱貞の辞
泊菴を引移す辞
阿弥陀寺禱の記事
六家会佛の辨
蕉翁画像讃
夏祝ひの頌
歳首の頌
馬瓢の山家の頌

年賀の頌
悼蕉雨逝文
去来丈艸傳
浮流法師傳

世後菊男送別
相雨の謙
松雀老隠之傳

七老亭之賦

一日吾来河内の二法師に出されて嵯峨に遊ぶ
師の房柿今を請ふにあらしの又道楽内して天花
寺のうし訶亀山の上にあらる宴に到しての亭あり
七老し名ほくいつれの山あらし此寺の長老七人出来
なりと造りて習静の床しなせしよりいつれかの
七叟の家をよみ七賢の詩を作しなりしたくひなるべし
その桜平にありてうちれかむに不平亀の尾山の甲
ともいふへく方一町とかりの間多きしかしていさゝか
路あやまれ急ぎおくれ歳の七人に尾山から

うけさかりにちかく松の中に咲こゝかれる花の梢は
十七夜の流れ流れ前るさまいそのきぬと白象にて
清かりしかし左の方を後日橋をくゝ横たはりて
りかゝる人の神なりと其の御とはしぬ清輪の薨は此の
松は国のかなる梅津の里の梅の愛をてし松の尾せい
宮村の松のみとりぬとしく立てもとへかは桂ゆかの
意の月新も桃李よりし詞は中古字の字根は又
なきし雲も以つしか清く詩なく雄の山のうれ
ともかく青くけれる鹿沢の池のうち栗なる水の
読よりもいすゝぬくまさかりなかめ入て右の方は又し

こゝ成立るかしこを古の大井川の水上まく山いよく
まり谷深くせまりて水藍よりも青く流れいつる
尾上にも大悲者の御堂なりし瓦ふくるまの見えたりける
さかし知祖こゝ成栗荷ひたる山人のうちはきなる却
ききさらかせする山のうひよりの流れ出る水に流れて
やしてれ茂生の多く清しなりてかしこの宮同とはり
こゝれ来る成けれしとくるせるけれのうちる人乳は
鳥なりのまのりやまりしかたらにおやしとも雲なも
さされ此晴月もおやなるにまたさし上る毎の多る
中に幕こちまいしいとまやなるに行なりし苗の

ちらきく河仮うらくみよこうしかりく笑ゆれ
よりへハ此る法河の物をいまやうあるうちあり
おるなさよしうちやしようぬ

山にくしちらも紙し再れ中　河内
山さくら紙士のもれとくほし　吾東
花ちりて河水元河くあるより　市厚
やす桜こ河ひ前しも大井河　蝶夏

湖水に遊ぶ賦

されけの早に湖のも岡をしてうりに七夜業田まり

しをえし神の鳥居さへ湖の中に見えぬしいふに此るハ
ちりて仕御の流御子花のあたりの景を見むとして御の今
うち此るめきて一筆の舟を漕出すに千葉盆のうちに出も
ゆきて網引藻をかる業のいとまなきに見えて波にうれて
仕御の流をさしてしまひにこのまたりハ琵琶の海の海を
尾になるへし神まわりまく山やまく向ひなる同
流れをなして流るゆゑに遠ひ日ゝ河ハ白浪なるをて
まさまし此所も水底の石出く人のりうに道をなしぬ
席のうちきしき石あれハ龍の姫しなる巖あり人其
隠るへき岩窟なしいうしも出れまされ岩の間を

白象をみたしたるとく藍を流さしやうにあのみきる
音し身すきましくもさしし獅子飛と吹えしおい
けし王の湖水まんくせまくなりく夜方の岩の方を
獅子の飛なとうなるゆゑとかこれ下段又やうに水の
洗の前る青れ雷なとのとく飛ちれる水の色は桜の
夕陽に飛ちてしけれは山に成桜谷といふなるし
都の下流に笑かしなしいふもその水の霰を飛し雲を
降し笑とくやしなれは山にとうや左の岩の上に古来社
うえをうに出さし涼しとて幣屋にいふ神の口名を
出し移し桜谷の宮なれは東守猪良ともかへし出れ

おもうは山にかゝ嶽の西南の麓にて湖水は山飛しけ
直ちてたり爰に人里あり大そうしいふこと見なき世のゆゑ
うなる桜を桃源ともいふなるかくれ里なり犬を又なれぬ
人を吠鶏を八つの時をうたふに心急きてこの流迫に
出くかれ飯くひ酒くかたすに人々弟の知らはりぬとて
湖水に到るに智丸青岸の疲れしかも出し人の
みなきいるのミ巨洲も人の肥ぬとうなるか水の中に遊
たるにもさし波猿を出さしにこれかく人の藥に魂送る
麻こう蓮等のかくてたるは西近江の佛なるしかなるの
聖靈なるへしや

誰送る佛のもてなし麻木かな

やゝ興しく晴たる空は粟津の里へとかゝりぬ舟子とも舟は漕よるに石山寺に晩鐘ほのかにして瀬田の橋よ上ら心ある季かりくさまひの月は此所よなかめしあるおしたりむかし東坡居士か赤壁の遊ひも七月既望と記しけるは名月の頃ろは湖上まさりて夜すがらの興なかるへしとて晴をかゝりこえるにわたくしこの夕それは清風おもむろよ吹て波も揺くと覺ゆるてこそもいへぬ景色なるに田上山より月のほり出て金の波をりなるに船中おほえぬ鳴呼とし思わくされは清風より

明月あり酒あり丈はの詩白あり横は背後の硯たり懐古の情のおこるは俵藤太の龍宮城の手柄話か次戸ありの筆をさひみなされ湖上よたらくし以よもなしも是成なるく人も此なく文字は此の哉は是そたゝいまくめてよ杯盤狼藉なるれと

篙は浮く影かりの乱れ舟の月

されまてよ世の移り景の變りては昔しこそもはその清風よ吹ちらひ早よ田畑のやきも浸も山間の明有よ忘れて一日の水精宮よ遊よ修行つや修行し直は此ま々かへらんよ行ゆめし其後よ写れわきまてると我ははくれ

三井の曉の鐘れ色なりしや

野菊の説

世に菊の花を書する人をみるに書きにつきし分芽出
朝より夜まで秋のくるしとも水をかへ肥培くるの
苗の出ならしとまれをあまを崩らしとまれは葉を
むしアてはむし造化の自然をうしまゝ或は罷の時に
まゝ内の時にもそようせひあれは油傳子に出る前の
清をもなめさせひしてやゝ咲そむる秋の中所より芽を
あなうり白紙めつらしかりしとし思き色あらしこれ

ねうひ出尺なかるゝすなはやしめ尺にはそのて多今の價を
たうそよみそ菊の隠逸とせし人も今も菊の麗をくれ
なきや花の寓意とや出うへのおしさまれをされ菊出
名さへ聖業のをうしくて田の畔地の陰に葉かりを
謙成のうれ牛るの歯にもあらして萩女郎菊のあらに
めれきるにも書かれまれを尾菊かるやの淋しきにむつ
きてるなきらけ心ある女の村のれなりまれかるもに
和白粉の粧もせく生うも糸斤の一姉しもやまるの
はしきうしも生れアしやくなくしなつかれそれし
かのなれを待ぬ無は山路の神も悠然と聆し玉雞の

杖もみなの菊なりいつるなくしおよそ世の人のわや
しれ茶めるましき形の流行の色なのこそそやて
かゝれ不易の茶も自ひもなしといふは茶の茶
茶とさしぬらやいらむ

九月を実にはよくなる四葉こうの

蜂の巣の説

草菴の精佛さる意なる情に作の意ありかたにいへと
なく蜂の二ツ来りて朝のよりしかを立さして居ら
しなる不思議の思ひをなしてこれは豆粒ばかりの巣
なし出来たりその巣なれば何の蜂の出来なり聞しかに
立まちりて暫もやまひ孫壱によりて壱されは又かより
蜂の三ツ四ツ来りて同し様に巣なれば見しに
此行をやゝ大さ鶏卵のことにありぬ是し人のよれ
きさひおれは新の色うらあらしき細腰よりさるに紀
劔をうち蜂り出て人を出すきすさ海し老よりを
十聖教なしよむへ出意の下にすへつし夜とや拵しと
出まへとはしくその巣の出来るりし始より成かうこと
又れは世の人の住所ともむるとて陰陽師に地をうら
なはしめ住達うらかり石をさる意柱をうて驚ぬ事

物を嫌ぎ玉の行うへし今の襖ちりて吉日良辰を
えらみわらはしの祝ひをふ我の松にあらへまゐ
妻にまゐ家し祝ひして年の亀にあやかしと
いふに君なりしこの二ツの蜂のいくとのかゝき月と
見てうゐ巣成三ツ葉四ツ葉の夏作りとも楽しみを
取しなひたい此家くし祝しくかしこの苦の蕊さの
葉末の雪成にくゝ来りて物のまを育てあるかうへり
きくとへてこの巣成譲のあるへて也く蜂思の家の
なれ絶さらしも成ねひ蜂大花の血をちはらし
事成会すらめされといふしか秋風の立来り木草の

色の加られるにもなれは人を近に夏に劍もそれ食を
もとむへに服もよくりたくはゆゑ嫌しくし苦のくり
言そいへし乾君もくるしくにようくしうこめをありき
千年家にもやはり成しと深もて自らる巣も孫には
明分の風に吹成されていつちの芥の中にやちりせ
なすされは加達か巣作りまゐ成ちとくしも其のなかも
よりの秋のはしめとやうく百日にそ見ひうく無者の
者まのぬるゝ成共しさるまゐ無事にはなかしと物の
巣にむかれて
よりをかしにもしりありきに秋ちかし

と独はのやきなりしかもの是なる事は人も想ひ
なりと佛の出現行しかと法にまして持佛の
前にさしうけむく

湯嶋三無の説　　但馬木卯需

むかし首尾のいて湯に宗祇法師宗長肖栖の二人と
具して湯の山三所の遠歌あり中に詩は山中の温泉
蓮二房昨嚢伯兎の姫ものとなりて山中三笑を
俳諧を得しられしかしまし五月雨の比伊賀の相彌
誘れて但うなれ城崎に来りて旅のやとのれ草枕も

こゝのれ蚊帳の色すゝしく紙子の蒲團のうすらぬ
情なれは猶あるかちなれ共園に履も初の上人あり
茶に仙霊の歌をいとひ酒に出し菊の母はひ云ふ
恵に富る人の有様にも似て旅情を忘れ待りて
日夜の詩笑のあるのにうれ三所の風流を出る花の
三笑の雅興をなつかしこ愛るをこゝもしるに物姫の
母のさしまに都の市のゆかしなと云ふのこゝぬを
すく

五月雨やかうしれいなく一回り　木卯

牟の浴衣をのれる姫牛　蝶夏

白氣の説

海内の人にうつりいれぬれ高岡高居二十日一堪之
人皆若狂とも牡丹のもやかなれを詩人の見あるこ
しなり菊をもてるもしまゝにもとしくさの人
かゝらば競へ色の異なるあらはれて異なるに
もまゝ接ふを合を百合なくへて殿のもめつし
うすゝやいつしゝ行のとある草木の葉は姉入とは
見ば無しけるなるとも先母草石蕗の度葉の
こと紀孫の色をかしむしに見れ百合に白く班なる色と
ましへまるけくし葉の新にして刻しへは白麻なし

いま病は似ていとゝあらはれなきまゝ狂されはあまそ
猿を衰ふるものにして肩に罷し犬をいとをしかに
猿におもはれるにあらはちくもも白氣と到
あるいはしう常の上に珠の思ひにめてまゝは氣壽
満百歳則色白とも黄金精紀為白氣とも唐の書にも
出戒しいとれおれはもやなまく見るなるに福の神と
いとひくめてなるあしに引主にまめやかに仕ふる者と
見て家の白氣と名はく世にまれなるなのもし人に
いつなるなるものは赤きに黒に班なる毛なる氣を
出来れは実もいつとり多きに末の世の他絡平忠臣

孝子のまれまれのも多れかも

古聲と名づくる説　備後田房越智某

象相合をて琴とあれ中に古の聲あり如の古聲
清くして味なく今りれ情に加まさんと白居易の作り
作りしとや芭蕉翁の俳雅もけるまめしまて点取
賭の世の中に紙詩の美なる青色にあつまく俳雅と
いふむしれ聲とよく世のほく俳流の重きちをあや
まれ事なかれとて如の名を古聲と呼ぶ
此さらに扇に書くまするな

枝法と号説　遠州濱松白輅需

永田行し別号我ましまるに枝法と号くこれにむし
弘恩とかせし禅法の道信と以ひし大国に對して
和尚の後横出一枝之佛法と称爽智し語とや加ま
らん蕉門の紙詩の道に一枝の俳流をけるをしまを思て
雷我出く世の日けまさむ梅の花

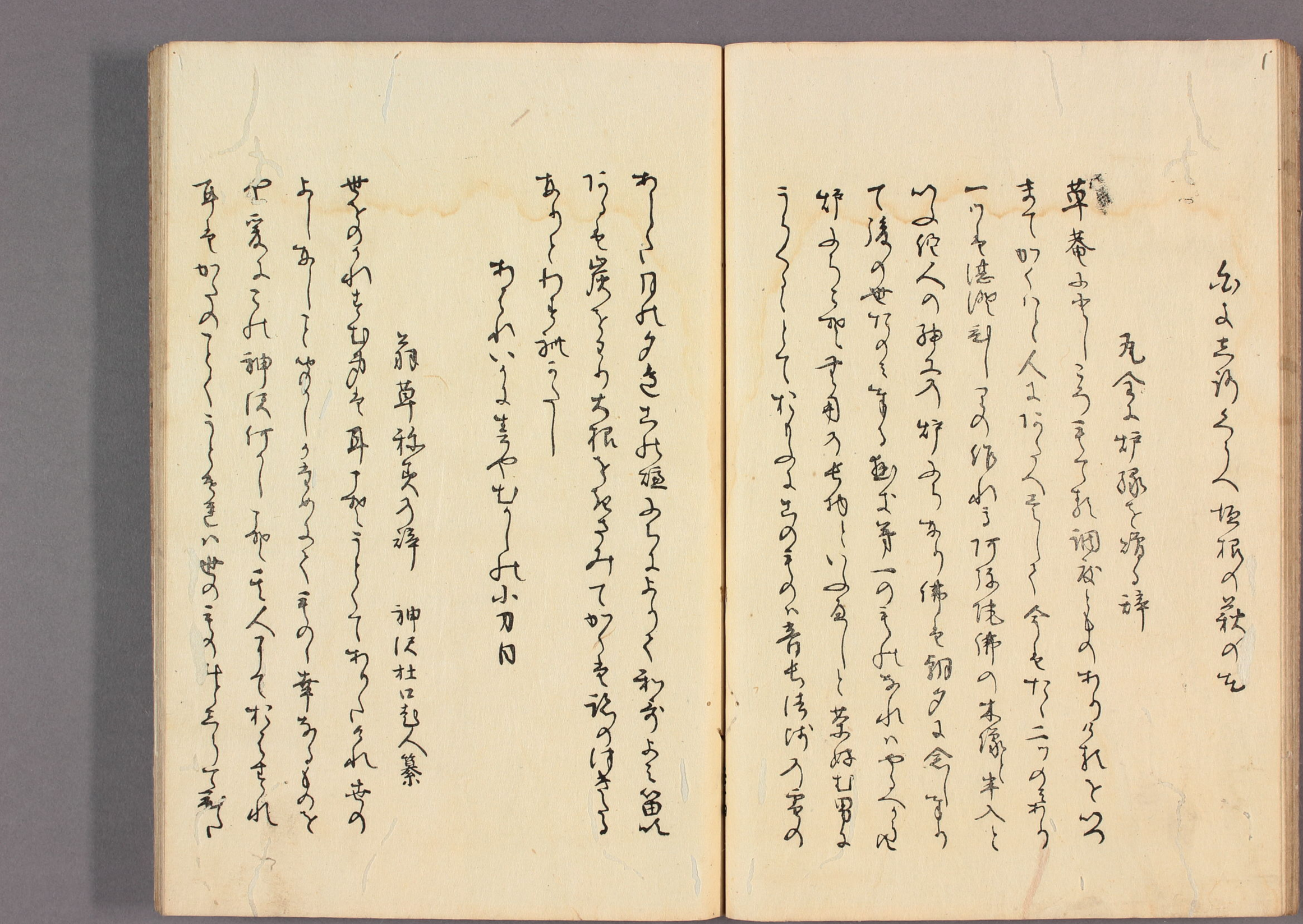
瓦全と名づくる説　洛陽柏原某

玉碎きしんより瓦全に生きましを清客のさらはて

わが紙詰の道に移し人をよしや石屋にいやしめる
心もなく世の中の今からんこれは今日の此雅なる宮
馬耳此の事にそよきれ行る向上の名を改く瓦全と
名づく　青紙入て鶯とまし　すてしき
なほ此しこの卯月に祖翁の新おにもつら製し
まる扇をまりて紙の今式の設はしめんとは
道に此流の行なるべし
扇おくいく世もあるきまてまつれ

犬をいたむ辞

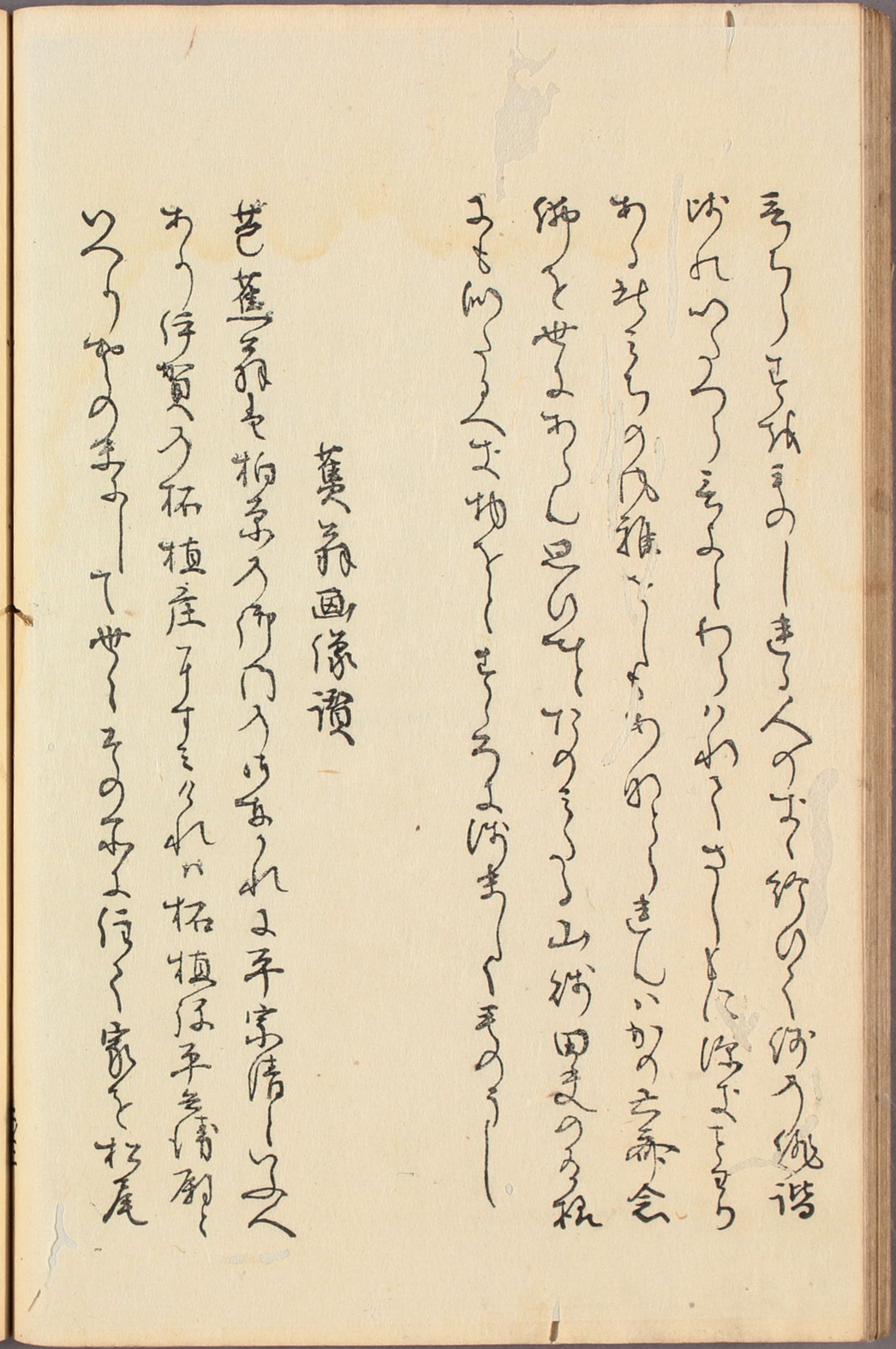
さうさむ里中に大きやかなる犬の白き毛なるありいと
さし年の毛はなるにや毛ぬきくおこなる
骨いて疲さらはひよ詠めまおりくはさに累ことして
喪家の犬のことしいひけるもかれからにや今
市門紙をもって吼へ人をむかへく尾を姫れ法とめも
得せんまして一陣をかきありきて敵の害実をさしも
多里にかきりく主の青紙をなすの達志はさは思
きえなりさる紙晴さらぬ事へとも万縄にて足を
はなまて引まりもてりにそのむつうしくねこ
家にさらひゆく事便なれなく者にて家の



かたけ事ぬいつまでもしかり入よいうれ智しゆふ[illegible]
尚祈持壬荊山ハ月ぬ種無ぬ[illegible]行るに和の
持壬もくましもみなかの事の人とありぬみのれとも
行ふつまし記其の世を一夜とほかの御所なるとし
思ふことのせちなるにあつしゆかりある音の燒し
詞に佛を忘するにあるを見るに悲しくやうて加の
菴ぬ引うつして三寶に供養しすしと人してあと
やかり行とぬかしむるに
泉ゆの入むもひし菴や出るし入間

阿弥陀寺詩の記事

嘉の春れ却火に洛中の寺院ろうかなく燒そしうう
中にも其云の孫院佛を安置して阿弥陀寺と名よ
ありかの佛セラ四大ぬ入化の靈像にくその世まで
多くの異霊を捨く幾度か火災にもあさせ行の[illegible]
[illegible]なく出る事しも其王の化像さしにそく 梅檀
なしぬ櫻にかれ行刻ぬるそ[illegible]なきに出かれい
其寺の名もむなしいうつしの草むしなりて 庚
申発も火の姫に而白鷺代も蛾[illegible]ゆきにす
[illegible]なく一口の梵詩のミ詠れ是出いその 音れ



言ひしまゝ我ものしまゝ人のおく行のくゝ御方御諧
御れいつゝ言ふとわりかねてさしもに深ぶことなり
ある計ふちの内雅にしたかねしきしいかの六藤会
御を世にあらん思ひ出てたのこゝる山御田まのの私
まも御ゝる人ぶ物としまゝ言ふに御まゝ手のうし

蕉翁画像讃

芭蕉翁を柏原の御門の御なれに平宗清しいふ人
あり伊賀の柘植産にすまゝれば柘植保平無清剛と
いへり御の事にして世にその事に伝く家を松尾

名我宗房しいふ藤堂氏に仕ふ馬の業のいふまは
内月の道我好く拾視所に学ぶ一ツ事ニ事におく
まゝ御の所に忠とつくしてもこゝ君の造髪をする
明山に収め生きしかに山雉の心やまて詩を雲霧にふかす
遥に年経く後むさしの深河ほとりに菴我しめ芭
蕉を植ゝわく芭蕉居しなれば羅房しいふも我に
破ぎやまた犯の観想まりとかしやしいまゝ四十にこゝ
さしく世の人翁と称す或年菴の火にかゝりける
時宗我のわく御に云ふことにしたるに拝如火宅世
理り我悟りや無所住の思ひせちにけり御斗教

むかしし禅法を佛頂和尚に参して三國相承
統記にけしあり法雅を西行上人をしたひて續
扶桑隠逸ぎに我奴絵に元録七年十月十二日浪速の
客舎に卒し散ハ粟津の義仲寺にうけめしも法也
琵琶湖の波にすなはちしなんなるへきか

雨後祝の頌

ちかし水無月夏姫うれも五十日あまりけしぬるに
土さへ黒き日に日に詩増さりきれいいたくさし中は
みたりの百姓のうるしこきしへしかるなし　稲大豆の

枯くしてのうしを瓜茄子のまゝにてもしまて早さる
培ひ夜まゝに水をくゝてまを黒ぎ日に伸る髪を
しも剃らん妻はいとをしおもひ乳を吸くむるのいと
まなし絵に水かれて私の悟に入洲なるれいかゝる姫
の御とてうし詩の如意の山の池に就神のみさし
きまに詣く雨をもの初せんとて里人うちけまるす
かの家に上りもしるは絵よこわるれは踊く神恵を
すしめ守らしかかるを海しまの殺生心経もあの
なりれと押柄々に不拍子の踊も祈るものさるなる
色て行ひてや里人のいまゝに山をたしさしにかゝれ

東南のかたに吉のまれい座を出せ詞しき鳴神も
手紀の神吉まちねし山地にくれしくやうて元を
墨成なるしやうにありて雨氣をかゝぬるゝ出しく
やゝ二時をうり降に降るにそみな人那に出く折
家にも酒とうひ餅をけおく脱ひさゝめまてさてハ
おもえよまね法術までも教貿の餅を喰ひたるも
まゝく此神のめくゝなる事し

夕ぎちや出れし草の菴まて

夏祝ひの頌　　鯉風需

世にいふ三りの夏の中に冥土の山の三國一の名山なるを
見にはへ藝能の名ともしめ青雲の雨あるいさま
にて商人の事にやうるゝなるへし前にハ冥雲の
色りて朱成奪しとする女の麦菓の上より玉簾の
中に罷をねしお表にハよくしかされとも事三の事に
出し入ぬきいたるにもいとし此扇の手詞くの
鳥の中にもたくましく生志にして國の守れ徒の上
より百姓の足もまゝ即しも山ともいとてかけ
免ひり朝とも晩ともけれかをよわりくうあるしか
事に應してまゝ向くめてなゆめなるへし

帯ひそ州ゆの鷹ゆきまなのし

歳首ゆ頌

さゆるより雪ぬらて雨ゆらに暖なれは垣根ゆ柳
こしらゆら津寺の梅さ花おこ詠ひつゝ今朝しも
あらりれ物作りのをのこ少しもの褌かつきぬして青の
こゆまいひ来れるけるもやうこうけりきり
草木のこゆ人ゆ云草も花ゆ春

馬瓢ゆ山家ゆ頌　湖東平尾里中西氏

家を白藤咨ゆ藤にありく門に八束穂の稲なくと
なしあるに手跡の苅木山とけむもなしひきる子
あれは牛刻きれ女ありて山里ゆなのしさうれ学の
和れ紐境ともいふ至しきよひ此家にやうくに
あらしれこてなしのまめやうなるに奥して
菜れあも山路ゆ菊れ花うや

年賀ゆ頌　筑前博多嵐魯需

筑紫に大果鼓ゆ人あり行居を名ゆ形に博多出
津にありくける絶京城四時になりめ学の業をくしを

ことて人をたさしれ物の仁術の徳ゝあまりにや子に
孫にいたるへくしく所さしやうにこし七十のまれなれ
生にあはしや内雅も聖坡叟ゝ道をけらへて名冬
そうきれいその年賀後祝しとて生とのなかなより
婦り来られる賀壽のれ南山と社しくけこかさは
さまれを物のなに氣象ゝいふ人ゝ書あつめて一冊と
なしこゝ物ゝ柄に物へて書ましそ世にかれ大
果報の人いけまの人かうしやまさしやはれいまの
集を見し人あやうしも我思さしや
花ゝ時やなさへ孫とへそのあさへ

豊後菊男送別

待居に夏後ゝうつくしと書しこゝ数のやうも多ゝ
年に加歳と言ゝ行の間に旅の者まきけられしも
物のいなるへしはれとさうひも毎ゝうへにはゝ
はしと異をられてうれ学のましいまもせほしきて
出のれ君ゝ時あり今にはゝ行の涼しうしてうしやほ
私に書けはしけしもまけしれ心なしやとまもに
うらにきこのなれなりぬ
秋の内にはれなや門ゝ所に方を

悼蕉雨送文　　越前小宮山氏

五十周月二日れ御の夏作のあうきは世をしきに知る
者あり心ぬかし氷鶏あるしかし人のいかてかゝる度に
訪ふしとはいやきあらし主むさに御力めおとる男入
敦賀の津より蕉雨を人入るとりまし故告来する
使の者ありとて文城さしむけ故見るにみなれし
身なり思ひなかし読に三来御懐安みぬ中安心無
ても憂世のもよつなれは一件のみも先を送る中上は通て
先と致安堵に左し用事仕辞次第上京とすなれ不
いしか大病頻むし云事書生も難叶赴に御座は是を

暇に御苦労御懇意に御祇難アそれは是ゝ云事御勝
気ニ御社中并五来皆し様ニ到る所なつしく宜安く
一小子郡後祥世の日御座はし胖一家共よりてしをは小
冊に追若集出雅席とも敵御編集ならは敦賀ニ
大雲ヲ曳尾と申候人御座は是懇ニ御座は間政御事を
ならはおる一瘤ゆへくれく音も入阿必度三ゆなと
心内ならは御社中不拘法の尾御殿は作異しなれは
皆様御ならはまてはし　　云月八日　　蕉雨
とおりくり返し読ま日ほ万事の詰寄なるもいまて
しくも思ひさりしに使の口つし出の廿八日の晩かに心

こゝろにはかなくして見る友は生し行ひ[illegible]
今はの根にむすはれまて整れぬる藤の喜のなこの
人やしこ詠の振舞は後世の営をなしみもあらん俗
詩の詩笑の道に惹ひく常ハうち訛ひ舞かなて
わかれ人にも宗の女喜にもとしれ人と無きられ
しにかれ一大事の期に等りしは空假をいとれ
しまとの後世者なるへしと思しさにまゝ随喜の
なこゝかひくせきとめかゝし出すあれと拝伐雅の
道には心浅してかゝり垂れ々れもまゝにはゝる色に
まれの道の因縁ならんかくて後の便りに浮世の[illegible]

蓮姫や病の床と気かゝり
とゆゑしにされいこれ彈指の間に彼国の切使他の
上に主り何の奇麗まれの異なりれ癖も深き
國の人となりていふ山上の異さの堪らいさ成昔語に
思ひしぬらしとおくこれにうやましきには果の日
なれいとて禽知の人に草菴にあつまり追善の
俗詩を異なりしかの嫡りする文を見て皆よく
と泣くありし世成世のひおひ々れ

相雨の誄

きる浄土へ千里し給ひけるに我のみ世に残れ何をか力

なく餅の念仏なして

やまかくて立のかけしとけもの陰

去来丈艸傳

去来姓は向井名は平次郎号義焉肥前長崎の人なり彼地の聖堂祭酒の氏族にして学は儒の業にして博く書にわたりて天文暦学に達きこえ詩歌俳諧にまたは沈勇にして騎射をも剣をも都にありし仕へしも遁世に住く事なりし官禄のいとまあるいは芭蕉翁に随ひて俳諧の風雅を学ぶ鴨川の辺に聖護院村に往りまた嵯峨の小倉山の麓に別荘をいとなみて住ける秋の比庭に柿の木多しとかくれ柿の落ると落柿舎と名付く菊亭内府公より柿の三字を賜はる宝永元年の秋九月十日没せし墓を東山真如堂にあり今の落柿舎は明和の頃重厚再興せり

丈艸俗姓は内藤氏にして尾張の国犬山の城主に武を好みし仕へしに文を好みして和漢の学ありなり仏学にふかく玉堂和尚の禅意成けし奉公を辞して薙髪を偈曰多年負屋一蝸牛化做蛞

蝓得自由登宅最惶涎沫盡追尋法雨入林丘愛白
源氏にきゆる我雲のやうりかしこ終にあはれを生て
湖南の粟津我ヶ岡に第無我むまひ佛幻房と呼
芭蕉翁を宗祖とひたくまてがの詠ありて岡の重
とは翁の滅後山にさりりて城悲を被さんこゝに
一石一字の法華經を書写して墳に築く元禄十
七年の春二月廿四日病床に坐化せ塚を我ヶ岡去
東林の中にあり正秀ヶ墓にとなれ

松萑老隠之傳

さらし十月十二日は何の粟津の寺にある翁忌におこ
てゝ立侍る是のなし本枯の いと寒きれに其の老波
の病心もとはくて此家に居よりきれにもやきのふの
暁うしなむ事まかり終ひぬとて家のうち云ひめれ
きれにそおり物ふさりし後さほれ所ぬ法しくさの
老人の生涯をおもふに産を伴孫の國にして姓を
太田名は見良號を資富先生とかきれ此雅の
名をは松萑老人とは我宗そ此にける世にその國れ
守に仕へ醫我えて業にしかかりしにより却り
趣学してかの是我きはめ國くもの名世にはゞ否の

林日よ志きの桂の豪家のよせをうりくれしかし
今の世れ世ね職乗物の足とやよ内俗をみくゝ志の
十と皆余のハ海中の和蔵を避て志の重護院
の杜の僧よかくれ病よ按して俸祿を辞し髪よ宗祇
の香のうほの深く足よ丈山の禁あるて姉ひ蝶の
小河よ乳をうつさぬ事十三年なり信徳と志る人
門ぶよ市我なせを志の住居さへかしうほしいなるん
山里なもし常をかされきる志れとも内雅の事を通
てとし此月との十二日ハ人ゝ我拓く内具よのほ知
さのくれハ蕉門の内流姉ひ却よ行れくむりハ

既喙よ去来あり今を東山よ松雀いまほしハ土と迫ふ事
えくれされハ此りし此事我病の床よむくて甲斐なき
枕の上ならし此学の張りこそ迫りよくりとて

何ゝてもうれ学のなしゝ志れくり

とゆえしもたや一月のむりしなんなりぬきふを
初月忌のいとなるに生前よ好ゝ遊びし道なれハとて
今思何りし何の社友を籟玄堂に請しく如在の
れ真いとまめやなるも此家にして志の月並の内席も
くようれりと思へハ如し詩よ志語さひしく一句よ和の
おもひをの意く捨乗の得しなせを一座ゝの云葉を

つまく追福の道を云ふく

浮流法師傳

法師は浮流の名を行玉志坂の産にして俗姓は青山なり
なまより学のもの我心に加きれ東飄西泊して夜詩
を学ひ和文を出て内月の才あり我の親は芭蕉翁の
門人誠人の世界なりしとかむの後その子に示しとて
家に孝をなさんとならば一向寺絶の念佛と蓮翁
の俳諧をつとめよと数々れとれこそ元来を思ひて
終に栗津明く義仲寺にて剃髪し浮流の

事故観してうつり浮流と名けく頻に蓮翁の古
のをなつしこそ伴賀の友生各の常祿寺に住ひて
遠りはむかし何しも老しいのものに住る詩なれも
ことや道のいうしく寫られを称しそや人は老老房と
あきらしくるかのむかしは言理起りちり見は年
よりことなといふ我かきくらに学のおしまるを
いとひて房の壁に足不むも老郷と書く佛渓
のうめしにならひ々我かせしこ絶の病重りて絶
要にいふれるとき

血に有れて死ぬ我まつや目とおれ

とみはらしきく急にのまゝかゝる詳へかゝれ
肯肉目胞の離おをくしむなるしまゝ
西むきに病苦まつり夏のつゝめ
ゝきしに都の器侍の師のかゝへ出くれとなる遣
除拂正念のさま成告るのんなるへしまゝに一朝
蕉門の風雅をたのしミ書侍の念佛に拂ひて夏の
遺訓をまゝ今孝の人といはまし時に天明二寅
年五月廿八日に相きとうとくはまし奴

杉蘿亭
居白